

---

# ポルノ恋愛

田尾 ラマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポルノ恋愛

### 【Nコード】

N3295M

### 【作者名】

田尾 ラマン

### 【あらすじ】

地下へ降りていくと、これがたまらんだのである。私は以前ファッションホテルの清掃のバイトをしていたことがあるがあれもたまらない。男の放出の臭気たるや、これは頭がくらっとしてしまうので、この地下ポルノ劇場に充滿する泥々とした臭い、これは女をまったく寄せ付け得ない。暗い。臭い。だが、無上の安堵感、誰でもないわたし……

## 恋バナ

地下へ降りていくと、これがたまらなのである。私は以前ファッションホテルの清掃のバイトをしていたことがあるがあれもたまらない。男の放出の臭気たるや、これは頭がくらつとしてしまうので、この地下ポルノ劇場に充滿する泥々とした臭い、これは女をまったく寄せ付け得ない。暗い。臭い。だが、無上の安堵感、誰でもないわたし、になれるため私は南海電鉄新今宮の西出口から、西成の職安内の二階へいったん上がり、わざわざ日雇い者達の視線を引かぬよう半パン、100均のビーサン、黒糖寒天とプリントされたタンクトップ、野球帽、無精ひげと、この『日本最大のスラムあいりん』にふさわしいこなれた感じをまとい、汚い横道とアーケードを抜け、地下の卑猥劇場「ピカデリー太閤」の「連れ込み兄嫁 薬指の技」や「痴漢デリ うずきの揺れ」といった演目のポスターの前に立つのである。ここはスラムの入り口でしかない。さらに奥地へ踏み入れるとチョンの間があり、民家の玄関にまさしくチョンと女が一人座っている。なんのことはない、普通の女である。案外高くてこれならばミナミのソープのほうが格段にましだろうと思いはすれど、昭和30年代式の骨董的風情を味わうのだと調子に乗り、思わずポルノついでに寄ってしまうのも一興。

なにはなくとも、ポルノである。ちなみに、この臭い空間にさきほども申し上げたように女なぞ、いない。いや、いる。だが、髪の毛のちらちりした掃除の女60過ぎといったところか。「はいーすまんでー」と言いながら演目と演目の間の、暗くない時間にやってきては吸殻や唾や痰を掃きとってゆく。放出の名残りなども絶対にそこここにあると思いきや、案外臭いはすれど、こぼれちゃいない。こんな下劣なくだりは文芸には控えるべきであると思ひながらも、言うなれば口淫。男同士で互いの精気を吸い取りあうというのがここが絶界たるゆえんである。女装した30あるいは40、ときには2

0そこそこのおかまが必ず一人二人おる。非常に女々しい仕草で肩をすばめ、常に強姦されておるようななふらふらした動きで館内を徘徊し、老人に手をひっぱられ、席で男のくせにブラジャーを剥ぎ取られ、おかまのくせに老人に口淫をされたりするのである。こういう次第であるので、館内いっぱいに響き渡る女優の喘ぎ声のなかで普通の恋愛話を展開するのは無理である。難しいテーマだと思える。神様、僕に文学をください。

私はそこにおよそ八回通った。だいたい二ヶ月の期間であつたから、週一。演目は3本立てでだいたい10日間ほど続く。そんなペー・スでこのポルノ映画業界が「兄嫁」やら「痴態非常勤」やらを発表できるほど、この日本のポルノ劇場のマーケットは大きくないので、むろん使いまわしである。なかには公開30年目という作品も少なくない。すべて懐古趣味。昭和30年代。チョンの間。アンパン。洗っていないため完全に褐色となつた背広の背中にマツキーで書かれた「田宮 良和」なる持ち主の名前。若者などおらん。だから私はここにおる。35歳にしてモトリアムの繭にこもるにはこういう退廃、厭世、背徳、汚泥が必要不可欠となる。田宮が死んだら、背広で名前を確認できるじゃないか。もう、泣き笑いの世界。

さて、恋バナ。2、3度通うと、だいたい見知れた顔も出てくるものである。といってもゾンビのようにそここでうごめく老人達は見分けがつかないが、それ以外の人種、たとえばおかま、なぜかおる美少年、めっちゃ怖い風体のやから、ギラギラした今風のウルフ系の男などを私は見覚えた。ゾンビ老人のなかでもとくに気持ち悪い類はやはり見覚えた。女の裸体が放つ桃色の明かりのなかをふらふらとろつき、客の隣が空いておる席があればずっと、腰を下ろす。観察しておると、老ゾンビは隣の、だいたいが日雇いの貧困者であつたり、あるいは恰幅のよい中年男であつたりするが、その顔にちらちらと目をやるのだ。ちらちらしていたかと思うと、あほかと思うような犯罪的な盗人調の動きで距離を縮める。そして男の股間を撫でさするのだ。だいたいはポルノに来るからにして、性に

対してアヘン的な高揚状態にあるからして、7、80の老人の愛撫ですら、拒むことを忘れ、まさに倒錯、変態的、フリーキー。老人の舌が唇を襲うことすら受け入れてしまい、たまに席が近いとせりふが聞こえる「声出して、声をさ、ほらあ」などとまさにゾンビの影がうごめくがごとく、なすがままに昇天する瞬間の男の声ならぬ声を最後に、放出はゾンビ老人に綺麗さっぱり吸い取られるのであった。その目的のために入れ歯をはなから外しておる地獄のダッチワイフ的な老人もおつて、この動きを追うのは、この絶界のポルノ鑑賞に並ぶ見物なのである。ちなみにこの地下の平均年齢70歳。じじいばかりなのである。ここへ通うまでついぞ感じずに生きてきたことであるが、老人の性欲、それも倒錯まじりの性欲を目の当たりにすると、さすがに人間の神秘的なグロテスクを感じずにはいられない。80近いとさすがに吸い取って満足といった様子であるが、70くらいのゾンビがゾンビに吸い付かれ、シルエツトでしかないが、その体がだんだんのけぞり、病院で医者がナースを後ろから突き上げている濡れ場を背景に、びくんびくん痙攣し、ああ放出したのだなと明確にわかる。悲しい。ちよつと笑える。肥溜め感。ああ、私はこの肥溜めに確かにあるなあ、と、これが生きておる実感でたまらない快樂。思わず、呆けた日には南海に乗って、またここへやって来ようなんて心に決めるのである。

ああ、恋バナがなかなか始まらない。ぐずぐずやってるとほんまに終わってしまうので、ここは一気加勢に述べ切ってしまうと、私はおかま、おかまといつても一応醜い老人がウィッグをかぶっただけ、から、一応、なんとなく女に見えなくもない、まで階層があるのだが、私が恋仲になったのはその女に見えなくもないほうのおかまであった。一回目はろくに言葉も交わさず、なすがまま。もみしだかれっぱなしで、これも文芸としては避けるべきであるところだが、要するに気持ちよくて、放出と相成り、二回目には私も勝手知ったる仲というわけで私も片子、そう片子というおかまであったが、片子42歳の股間をまさぐったが、結局結末は似たようなもので、

気持ちよくなつてしまった。そんなこんなの3回目、4回目で、4回目にはふたりして地上に上がった。その日は日曜日の昼下がりで、通天閣界限は実に異様、否、ゾンビ地獄から這い上がった自分らの感覚こそ異常なのであつて、通りを闊歩するオサレカップルなどにあつけにとられつつ、隣になぜかある、この汚い異様に黒ずんでいて油なのかテカテカとしているけばい化粧の化け物おかまに、改めて地上の感覚をもつて驚いたりしたのである。

片子とは馬が合った。私は高野山で餅を売るみやげ物屋を営んでいたのだが、高野山の入り口でやればいいものを、なにをどうして奥の院よりもさらに奥、弘法さまの背面にあたる場所に店を構えてしまったものだから細々と3代続けた末、先々月に廃業した。したがつて私は高野山生まれである。一方片子は生粋の西成生まれ、西成育ち。九州、東北、沖縄、外国。この界限は他所者で溢れかえっているが、片子の母は男に捨てられ、流れ着いた西成で片子、いや本名 宗治を産んだ。私は店を潰したせいで、もともと希薄だった生きることに對しての執着をほぼ失っていた。幼少より奥の院の、信玄やら、えんたつアチャコやら、シロアリの墓、日本国中の有名な人の墓石などが数万基、累々とまた肅々と並ぶ現世に黄泉がこぼれ落ちたような世界に住んでいたために、余計死というものに近しく、生死のぎりぎりのはざままで境界線がぼんやりしておつた。片子は片子で生まれながらにしてスラム、母はアンパン中毒、身も蓋もない境遇に生まれ落ち、唯一サバイバルの手段として身に着けたのが、この女装して地下世界で売春行為という生業であつた。そうした世界の終わりのような場所で片子はぼろきれのような生にしがみついておつた。私はそのなんというか、しがみつき方というか、しがみついている生があまりにもぼろぼろであるところとか、そういう所に異常に惹かれたのである。先ほども申し上げたが、片子そのものは日中連れて歩くに相当な勇気がいるような絶望的な容姿であつた。地下世界では、女にみえなくもないという理由でわりかし上位の階層におれたものの、ひとたび地上に上がれば無理。暗闇から光の下

に出るとだめなわけであつて、私はそういった機会のあるたびに新鮮にシヨックを受け続けた。飽きないホラーとでも呼べばいいか。

片子は私のなんとなく浮世離れした浮遊感、生きているのか死んでいるのかよくわからない半透明の幽霊が海面を漂っているような感じを無上に好み、私は私で、この歩く地下世界のような絶望的なおかまの生への執着に、自分が持ち得ない特質を見出し、あるいは片子という存在への侮蔑も混じり、とにかくにも我々は互いに執着しあつたのである。

片子の部屋は飛田の奥へいったところ、向かいがチョンの間。ワールドハイツという二階建ての文化住宅であつた。ポルノ通いは止して、片子の部屋に棲みつき、かくして私はこの土地の住人となつた。とはいふものの、することがない。6畳4畳の畳部屋。からからと大時代的な響きのする、すり硝子に木枠の窓を引き開けると、向かいのチョンの間を見下ろせる。昼間はなんのことはない、ただの民家。表札すらかかつている。田中とか。高崎とか。これが5時過ぎると売春店に様変わりするのであつて、これは実に刹那というか、その変化ぶりが最初の一週間ほどは妙に子供ごころをくすぐり、昼間からからと薄く窓を開けては、半目で田中家を盗み見る。戸締りぴつちり、時々70がらみの婆が水を撒いたりしよる以外に取り立てて書くこともない。そいでもって夜、日がすっかり暮れてしまつてから、またからから窓を薄く開け盗み見る。田中家の玄関の引き戸が引き開けられ、玄関にチョンと座つた女が一人、人もまばらな通りに向かつて女座りで斜に座っている。可笑しいのは、女の傍らに赤色の光を放つスタンドライトが置いてあつて、それが花魁見せのようであつて、これが普通の民家の玄関先にあるもんだから実に異様。玄関開けて、こんばんわーなんて入つてみたら、いきなり赤くてエロスな女が座つておるのだ。しかしその目は通りを見ていない。だいたい自分のマニキュアを見ておつたり、ぼくと、このスラムの虚空を、日本のSF都市を夢見て名づけられた「新世界」を、エッフェル塔を想起させんとうちたてた通天閣を、あるいはバ

ブル期に「建物の中をジェットコースターが走りよる！」と話題をさらったが結局行かずじまいに操業停止となった商業施設跡を、ぼくと、ただ死んだ目で眺めておるだけ。私は片子が地下ポルノで口淫をやつて日銭を稼ぎ、真夜中に帰ってきて、遅い晩飯を支度してくれるまでは、そんなことをやつたりして気をまぎらわし、そこいらを散歩するなりして暇を潰しておつた。

片子に養われること3週間。7割がた此処特有の臭いというか、オーラのようなのが、格好だけでなく、立ち居振る舞い仕草たらずまいからそこはかたなく、漂うようになってきた。ポルノを覗けば、支配人兼、もぎりの爺に、よつ、などと手を上げてみたりする。ちよつとした京都花街の旦那衆気取り、粹人氣取りで、このスラムが私のからだにだんだんと沁み込んでいった。愛液が沁み出るがごとく、私の体の奥から、この土地と同じ匂いのする成分が、じわじわと沁み出てくるのであつた。

ところで、そんな日々のなか私はもとと性欲が旺盛なほうであつた。したがつてだいたいが片子に処理してもらうのだが、片子はこれは化け物である。化粧し、かつらを被つてミニスカートにヒールなど履けば、これは多少なりとも嫌悪感も薄れるのではあるが、それもあの地下ポルノの暗闇のなかでこそ、の話。6畳の部屋に片子とふたりきり、いくら電気を消してみても、仕事用の着飾りを失つた片子は、かつらのせいで頭皮が蒸し、毛根が弱り、髪の毛は異常に細く、頭皮が透けて見える。目鼻立ちは大造りで、化粧をすればこれは映えていいのだが、化粧を取ると逆に扁平顔の私よりも立派な中年男の顔であり、そんなのが、なんとなく女物の赤玉のパジャマを着てそばにいるのが、慣れれば慣れるほどに気持ちが悪いのである。さらにいえば、片子こと本名 宗治は、このスラムで生き抜くためにおかまを選んだだけであつて、彼の肉体的遺伝子的な構造に女性ホルモンは一切なく、彼はただ、14で女装を始め、毎晩毎晩此処の男達の異性への欲求を処理してかれこれ25年。自分が男が好きかとか、女が好きかなどとつくに忘れてしまつていて、



ただ精神構造がすっかり仕事用になってしまっているというだけで、私生活もこんな赤玉のパジャマを着るという女性的なスタイルになっているだけなのである。であるから、ニューハーフのたぐいとは違って、ナチュラルに女性的なスタイルを求めたわけではなく、繰り返し演じているうちに男の自分を忘れさってしまっただけの本当に刹那、切なすぎる生き物なのである。そして、それに夜な夜な処理してもらっている自分も刹那。本物の女が抱きたい。股間でうごめく片子の猫っ毛な後頭部を見下ろしながら、ふと思ってしまうのだった。

そうこうするうち、向かいの田中家の売春婦と仲良くなった。カチャ・真知子・ピンケスといった。タイはチェンマイの生まれ。遠目には日本人に見える。父親は日本人、母親は元パッポンの娼婦。日本国籍を取って、姉と来日したが、父は行方不明、西川口、北新地、ミナミ。流れ流れて此処のチョンの間へ。姉は耐え切れずチェンマイの田舎へ帰った。本番一回、14000円。7割を田中の婆さんが取り、残りの3割を報酬として受け取るという。34歳。身売って生活するのも限界だろうにと言うと、力なく「この年でガイジンで働けるのここだけね」と笑う。カチャでも、真知子でもどっちで呼んでくれていいという。私はカチャ、と呼んだ。

片子が昼過ぎに出て行くと、私は自転車で5分ほどのところにあるカチャの部屋に通った。7階建てのアパート。6畳一間、風呂なし。ベッド付近の壁には一家の写真がたくさん張ってあった。カチャは蛙を思わせる顔をしていた。乳は小さく、尻も腹も大きい。私が行くと、やたらと抱きついてきた。なにせよ、女。カチャが身支度を始める4時過ぎまで、私はカチャの体を何度も求めた。此処では女と若者は、圧倒的に数が少ない。通りを歩くのは、50からみ、60がらみの日雇い生活者、あるいは、年寄り。どれもこれも男である。女はめったにいないし、怖がって寄り付かない。男、男、男、通りを満たす人間の臭気。汗が発酵に発酵を重ね、この街独特の臭さを造り上げている。此処にいと女の匂いに異様に敏感になる。クリスチャンの若い女達がビラを配っている。身なりも肌つや

も綺麗で。なによりも目が澱んでなくて。手に入らぬものだと知りつつも、凝視する。通り過ぎてても振り返ってその尻や胸を脳に刷り込もうと凝視する。あの子らは住む世界が違うんや。そう思いつつ、あの子らが住む世界、清潔で、甘い匂いがし、使命があつて、友達がい、きらきらした会話があつて、ちゃんとした社会があり生活があり仕事がある。そんな世界のなかであの子らはあのはじけるような裸身を毎晩洗い、石鹸のいい匂いで包み込んでいるのだ。とにかく此処ではないどこか。そんな場所からあの子らはやってきて、この肥溜めにビラを撒くだけ撒いて、去って行っていく。

カチャよ、もっかい抱かしてくれ。

片子の部屋での生活をひと月そこから終わらせ、カチャの部屋へ移った。

【執筆中】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3295m/>

---

ポルノ恋愛

2010年10月8日23時39分発行